



二〇二三年 春号

海禅寺新聞

Vol.37

『海禅寺新聞』第37号

季節は春。草木も芽吹きだし、生氣溢れる自然の姿を前に、気持ちもワクワクするものですね。今回は冒頭で詩を紹介します。

六つになった

A・Aミルン 作

一つのとときは

なにもかもはじめてだった



二つのとときは

ぼくはまるつきりしんまいだった

三つのとときは

ぼくはやつとぼくになった

四つのとときは

ぼくはおおきくなりたかった

五つのとときは

なにからなにまでおもしろかった

いまは六つで

ぼくはありつたけおりこうです

だからいつまでも

六つでいたいとぼくはおもいます

子どもの成長の様を表している詩です。ゆつくりだけれど確実に、心が広がって育っていく様子がよく表現されていますね。人生1年目の赤ちゃんが見ている世界。想像してみると何とも愛おしいような、あたたかい気持ちになってきます。

そして私たち大人も、誰もがかつてこの段階を経て人生をスタートし、今日まで年月を重ね生きてきました。乳幼児という物事をありのままに捉え、ただただ生きることに一生懸命だった存在は、たくさん経験し、学び、大人になります。大人となる過程で、私たちが得たもの、そして失ったもの。そしてまだまだ思い出すことで取り戻すことができる、純粹に生きるという感覚。新しい命が芽吹く春だからこそ、自分の命に改めて心向け、充実した今に気付いていきたいものです。

春彼岸会 中日法要のご案内

恒例の春彼岸会法要を海禅寺本堂でお勤めいたします。皆さんで先祖の供養をいたしましょう。どうぞご家族そろってお出かけください。(申込不要)

日程：令和5年3月21日(火・祝)

時間：受付 午前10時

法要 午前10時30分

※法要終了後の茶話会ですが、今回も感染症に配慮して中止します。

※彼岸会中日法要の供養塔婆をご希望の方は、3月18日(土) 夕刻までにお申し込みください。(供養塔婆料 一基 3000円)

※同日午前9時〜午後1時まで永代供養堂の扉をお開けしています。お堂の中には入れませんが、外からご自由に参拝いただけます。

電話：0268-222-2972
ファックス：0268-268-1147

海禅寺住職「大僧正」辞令親授

去る二月二十七日、海禅寺住職が総本山智積院において、布施浄慧管長親下より僧階一級の辞令を拝受いたしました。いわゆる「大僧正」という階級です。宗派の諮問機関より住職のこれまでの宗派内外における勤めをご評価いただき、この僧階を賜りました。これは偏に檀信徒皆様による常のお支えがあつての事です。ここに感謝申し上げると共に、謹んでご報告いたします。



『生きる力 vol.1-2』送付

今回の特集も、弘法大師空海様のご誕生千二百五十年にちなみ「生きる力とお大師様」です。また本山でこの度の奉修事業の一環として新規定立された『展示収蔵庫宝物館』についてもご案内があります。ご関心をお寄せいただけましたら幸いです。

告知 『寺ヨガ』はじめてます

昨年からは海禅寺で月一回のペースでヨガ教室を行っています。未経験者大歓迎です。単発の参加でも大丈夫です。ご希望の方はお電話でお申込みください。

先生：山浦佳子 先生
日程：4月16日(日)
5月28日(日)
6月11日(日)

指導：各回午後2時半〜(約90分間)

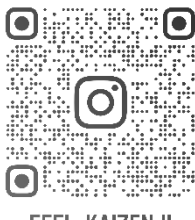
費用：1回1500円

会場：本堂または会議室

定員：15名

申込：必須です

今後の予定については、海禅寺のインスタグラムをご覧ください。お電話でお問い合わせください。



FEEL_KAIZENJI



おねがい

第12回 聖天祭 開催決定

壇信徒の皆様にご理解ご協力をいただき5月の恒例行事となった聖天祭は、おかげさまで12回目となります。

実行委員会では、お祭りをお手伝いいただけるスタッフを大募集中です。内容は、会場準備・片付け・駐車場係・会場案内・見回りなどですが、ご無理のない可能な時間帯に限ってでも構いません。お祭りを作り上げる喜びを共有していただき、お檀家の皆さん、そして有志のスタッフの皆さん同士が、あたたかな仲間としてご縁が広がっていくことを願っております。ぜひお気軽にお問い合わせください。

※受付数に限りはありますが、出店者の募集もしております。いわゆるテキヤの方のお申込みはお断りしております。詳しくは寺にお尋ねください。(事前申込必須)

【聖天祭 日時】

日程：令和5年5月14日(日)
時間：午前10時～午後3時

よきお願いまつり

しょうてんまつり

聖天祭

スタッフ大募集

上田獅子

上田市の無形文化財、『上田獅子』。上田獅子は、市内の旧常田村、旧房山村に伝えられる『常田獅子』と『房山獅子』の総称で、ともに両村の祇園祭の際に演舞してまいりました。元々は関東地域に多く残る三頭獅子(ミツガシラジシ)・演者一人が一つの獅子頭を被り、三人で三頭の獅子を舞う形態の流れであり、上田市真田町の本原区上原に伝わる「上原三ツ頭獅子」が原型ではないかとも言われています。一説には常田獅子の舞いは田植えを表し、房山獅子が稲刈りの様を舞い表現しているとされます。そのため、当時は両獅子が一緒に演舞していたようです。

天正十一年(1583)、真田昌幸公が上田城築城の際、上田獅子は城の地固め式として獅子演舞を奉納しました。また仙石忠政が上田城を再築したときも、真田の例にならない演舞が奉納されました。

以来、吉例として松平氏にも引継がれ、城主の保護のもとに格式と洗練が加えられ、明治以後も特別な行事の折には各所で演舞が奉納されてきました。

今では常田獅子保存会と房山獅子保存会とが伝統を引継ぎ、現在に至ります。演舞されるのは上田祇園祭の時ではなく、四月の上田真田祭の際に行われます。なお上田市の予算の都合で、隔年で常田獅子と



房山獅子が交互に登場しています。

また上田地域では家の新築時などの縁起物として農民美術(木彫り)の上田獅子が贈答用として好まれています。皆さんの自宅の玄関などにも、上田獅子の木彫りが飾られているかもしれません。

さて海禅寺の副住職はご縁あつて房山獅子の獅子役を勤めています。また海禅寺は旧房山村地籍の寺のため、お檀家さんの中には房山獅子の笛役を勤める方もおられます。私も元々は笛役をいただいていたが、有り難い巡り合わせがあり、今は獅子役を拝命しています。獅子の装束は古の形をそのまま継承しているとされていますが、文様などのデザインは現代的な感覚で見ても魅力的な印象があります。また獅子は腰に「腰御幣」という五色紙で作った幣束を着けます。恐らく自身の身体自体を、神の依り代とする表現でしょう。そして何より獅子本体の獅子頭には、何とも言えない存在感があります。時代の変遷の中で大きさをやや小さくしてつくりなおしたものを今は使用しているようですが、三頭の獅子は皆表情が違い、味わいがあります。そして一番目を引くのが獅子のタテガミです。よくカラスの羽かと尋ねられますが、そうではなく「ボウマル」という国指定天然記念物である鳥の羽だと諸先輩より伝え聞いています。

ところで真田祭りの際、演舞と演舞の間に獅子頭を担いで町中を歩いていると、写真愛好家の方によく写真撮影をさせて欲しいと求められることがあります。もちろん快諾し、少々真剣な表情をつくりカメラを向くと、大抵は「あなたの顔はいいから早く獅子頭をかぶってくれ」と言われてしまいます(獅子頭をかぶると顔は完全に隠れます)。とほほです(笑)。



さて、先に書いたように今では常田獅子と房山獅子の演舞を同時に見る機会はなかなか難しくなっています。しかし今年の五月二十日(土)、長らく新設工事をしてきた上田市役所がいよいよグランドオープンします。保存会からの情報によると、このオープニングセレモニーで、上田城築城の吉例にならつて、常田獅子と房山獅子の演舞が計画されているそうです。正式に決まれば上田市広報などで公開されることと思います。また今年の五月には長く続いたコロナ禍が大きな節目を迎えるようです。獅子舞という伝統芸能に先人達は、魔を祓い、吉祥を招く深い祈りを込めてきました。『上田獅子』、ぜひご注目ください。

発行元 海禅寺